

Towards a Paradigm Shift in Cholesterol Treatment

A Re-Examination of the Cholesterol Issue in Japan

浜崎智仁、奥山治美、大櫛陽一、浜六郎 著

この本 {実際は雑誌の増刊号、Ann Nutr Metabol 2015; 66 (Suppl 4): 1-116} は日本でのコレステロール治療の根本がいかにかに怪しいかを、主に日本での疫学調査と 2012 年度版の動脈硬化学会のガイドラインを精査する形で述べたものである。Free access : <http://www.karger.com/Journal/Issue/266692> となっている。Free access とは、著作権は出版社 (Karger 社) が持っているが、出版費用は出版社がすべて負担する方法で、現在はやりの著者が出版費用を負担する open access とは異なる。

PDF ファイル入手先

目次等 : <http://www.karger.com/Article/Pdf/381653>

本文等 : <http://www.karger.com/Article/Pdf/381654>

欧米の出版社から学術関連の本を執筆依頼された場合、ほぼ例外なく原稿料も印税も入らない。そこで、本が出版される時は広く世に出回るように、安く売ってくれることを願うことになる。この本も 2 万円前後するはずだったようで、皆様方が気軽に中身を覗くことなどあり得ないと覚悟していた。ところが最後の段階になって、Karger 社の役員がこの本の重要性を認識し、破格の free access となった。新刊の本一冊分が最初からまるまる free access となることなど、常識的にはあり得ない。しかも、製薬会社を敵に回す可能性が大きい内容の本を出版するとなると、中堅の医学関連出版社の Karger 社としては、かなりの覚悟が必要だったはずである。

内容は、一言でいえばコレステロールは敵ではなく、味方だということ。日本では、一つの疫学調査を除けば、総コレステロール (あるいは LDL-コレステロール) が高い方が、総死亡率は低い。この関係は、コレステロールが低下するほど重症な参加者を除くため、最初の数年の死亡者を除いても成り立つ。世界的には高齢者で見ると、この関係はいかなる地域でも成立する。

他にも、家族性高コレステロール血症 (FH) が全てを解く鍵であること、その FH が心筋梗塞を起こすのは、コレステロールのせいではなく、別の原因があること (凝固系の亢進、あるいは LDL を利用できないため血管が栄養不足を起こすなど) が問題であることなどを示した。実際、ヘテロの FH で心筋梗塞を起こす人と起こさない人ではコレステロール値に差はない。しかもこれは天井効果などではない。ホモタイプの FH では、コレステロール値がさらに高く、

冠動脈疾患による死亡率もさらに高いからだ。

動脈硬化学会のガイドラインについては、粘り強く精密に調査した。ガイドラインに出てくる重要な日本の研究を詳細に調べると、論文の中に不合理な点が多数見つかった。動脈硬化学会が参考文献として挙げた文献については、是非本書を読んで頂ければと思う。重大なスタチンの問題点も記載した。スタチンは血液脳関門を通過するのである。脳は外界からコレステロールをもらわない唯一の臓器で、自分自身でコレステロールを合成している。しかも他の臓器の約 10 倍もコレステロールがつまっている。スタチンで精神神経系の副作用が出ないわけがない。

各章には **Abstract** がついているため、そこだけでもお読み頂ければ、内容が理解できるようになっている。この徹底的調査は、何らかの思想や団体の思惑、あるいはいかなる利益相反とも無縁である。筆頭著者は、昨年より講演料、取材協力費等すら辞退している。

最後に、この **Karger** というスイスの出版社はとてもユニークな出版社である。今に至るまで、とうとう一度も書類による契約書を交わさなかった。著作権を譲渡するとの契約書も存在しなければ、口約束すらない。全て、紳士協定なのだ。**Karger** 社のおかげで、大変貴重な別世界を体験させて頂いた。ただ感謝。

紹介：浜崎智仁